

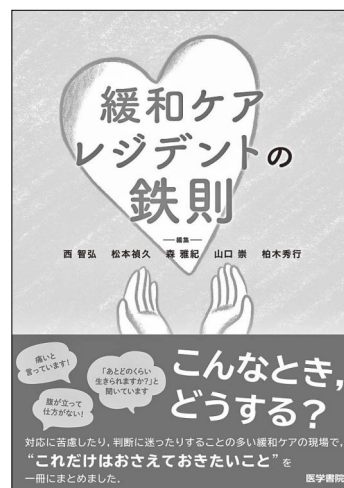
緩和ケアレジデントの鉄則

西 智弘, 松本禎久, 森 雅紀, 山口 崇, 柏木秀行【編】

評者

佐々木 淳

医療法人社団悠翔会理事長



僕が在宅医療の世界に足を踏み入れたのは 2006 年のこと。

医師として 9 年目。急性期医療に携わりながら、自分の仕事が患者さんを幸せにしているのか悩んでいた大学院生時代、偶然に在宅医療のアルバイトに出合った。人工呼吸器とともに日々をポジティブに生きる人、残された時間が長くないことを知りながらも自分の人生を振り返りながら家族との時間をいとおしむように過ごす人、病院で診てきた「患者」とは違う、「生活者」としてのその人たちの表情を見ることができた。治らない病気や障害があっても、人生の最終段階にあっても、人は最期まで幸せに生き切ることができる。医師としての価値観を揺るがされるような衝撃だった。その半年後、大学院を退学した僕は、最初の在宅療養支援診療所を開設する。

「安心して生活が継続できる、
納得して人生を生き切れる」

在宅医療の存在意義をこのように定義した僕は、開業後すぐに打ちのめされた。在宅医療は、実は緩和ケアだった。人が穏やかさを取り戻すためには、情熱だけではダメ、「苦痛」を緩和するための知識とスキルが必要なのだ。

急性期病院でも病棟主治医として終末期の患者さんたちを診ていた。できると思っていた。しかし、それは病院のチーム医療が機能しているという前提で、実は指

示書にサインをしていただけだったということに気がついた。

在宅を選択した人に、その覚悟に見合った幸せな時間を提供したい。緩和ケアの臨床研修を受けたことのない僕は、在宅医になって初めて緩和医療の成書を読み、マニュアルを片手に試行錯誤をすることになった。それから 15 年。緩和ケアの何たるかがようやくわかってきたような気がする。

本書は緩和ケアに関する最新の知見が包括的に網羅されている。

項目はプロブレムオリエンテッドにまとめられている。現場で困ったときに、そのシチュエーションから必要な情報にスムーズにつながる。日々の診療で悩んだときに「これでいいのかな？」と思ったら、すぐに確認できる。人生の最終段階の支援には才能と適性が必要だと思っている人も多いと思う。本書では、終末期とコミュニケーションについて、十分なエビデンスとともにナラティブを含む臨床倫理について丁寧に説明され、スピリチュアルケアや意思決定支援をフレームワークで理解できる。緩和ケアマニュアルとしてはファーストチョイスの 1 冊と言えると思う。15 年前にこの本があれば、もう少し早くひとり立ちできていたかもしれない。

緩和ケアレジデント向けということになっているが、在宅医療のマニュアルとしてそのまま使え

る。僕のように、緩和ケアの十分な経験のないまま、在宅医療の世界に入る人は少なくないと思う。在宅医療や訪問看護に関わる人にも手に取ってもらいたい。

本書を最初に読み終えたとき、僕の中に残った一番強いメッセージは「がんだから、で片づけない」。在宅医療の世界でも、「老衰だから」「認知症だから」で片づけられている人がたくさんいる。丁寧に臨床推論を重ね、その人が本当に必要な支援に最短距離でつなぐこと。これはすべての対人援助に共通するメッセージであるはずだ。

緩和ケアが必要な人に確実に届くこと。そして、誰もが穏やかに人生を生き切れること。そのためには人生の最終段階の支援に関わるすべての医療者が、必要な知識とスキル、そしてコンセプトを学び、習得する必要がある。

1 人でも多くの医療者が本書を手にとってくれることを願ってやまない。

B5 判・頁 250

2020 年 5 月

定価：本体 3,800 円＋税

〔ISBN978-4-260-04128-7〕

医学書院刊